
アウト！

おっとり

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウト！

【Zコード】

Z8611C

【作者名】

おつとつ

【あらすじ】

一話完結型のシリーズものです。そして恋愛小説です。おふざけ無し。しかし、その実態は「カップリングの限界」に挑戦する作者を主人公としたアドベンチャー小説かもしれません。馬鹿な試みですがお付き合い下さい。ただし！注意書きを読んだ上で・・・。

注意書き

この小説には、冒涜的カップリングやグロテスクなカップリングが含まれています。

読む際は、以下の注意点に従つて読みましょう。

1・ファンファイクション小説

この小説は「名探偵コナン」を下敷きとしたファンファイクション小説です。ファンファイクションというジャンルに嫌悪を感じる方、または「名探偵コナン」 자체が嫌いな方には不向きな小説となっています。以上の条件に当てはまる方は読むのを控えましょう。以上の条件に当てはまり、尚且つ、それでも読みたいと言う方は、医師に相談の上、自己の責任において読みましょう。

2・恋愛小説

この小説は恋愛小説です。基本、二人の男女が愛し合います。そういう話が苦手な方、又は、ボーイズラブ・ガールズラブ等の同性愛小説を好む方には不向きな内容となっています。以上の条件に当てはまる方は読むのを控えましょう。以上の条件に当てはまり、尚且つ、それでも読みたいと言う方は、医師に相談の上、自己の責任において読みましょう。

3・カップリング

この小説で取り扱われるカップリングは、非常に奇抜なものとなっています。原作カップリング重視、又は、他のファンファイクション小説で扱われている様な一般的カップリング（口哀、新志、平志など）を好まれる方には、過度の不快感を生じさせる危険性があります。事前に医師と相談の上、自己の責任において読みましょう。

4・作者おつとつ

この小説は「おつとつ」により執筆されたものです。しかし、この小説を「フリー・ザ様と灰原さん」と似たような内容の小説と思って読むと、一種の「期待外れ感」に襲われ、最悪の場合、死に至る危険性があります。この小説は根本的な部分で間違っていますが、内容はただの恋愛小説となつております。「フリー・ザ様と灰原さん」の読後、30分以内に読むと副作用が出る危険性があります。事前に医師と相談の上、自己の責任において読みましょう。

5・身体への害

もし、この小説を読んだ上で、吐気、眩暈、頭痛、じんましん等の異常が生じた場合、すぐに読むのを中止し、医師の適切な診断、治療を受けて下さい。また、以上の注意書きを読まずに誤つて本文を読んでしまった場合、すぐに読むのを中止し、清潔な水で目を洗い、すぐに医師の適切な診断、治療を受けて下さい。

6・こんな時は・・・？

- (1) 「この小説は素適だなあ」と思った場合・・・
あなたの精神はとても危険な状態にあります。すぐに精神科の医師の診察を受けて下さい。
- (2) 「この小説はまるで犬のフンだ！」と憤りを感じた場合・・・
感想・評価を書き込みます。作者に罵声を浴びせましょう。
- (3) それでも怒りが收まらない！
作者にメッセージが送れます。思い切り汚い言葉で罵りましょ。
- (4) それでも怒りが收まらない！
2ちゃんねるに悪口を書き込みましょう。
- (5) それでも怒りが收まらない！
医師、薬剤師に相談の上、精神安定剤を処方して貰つて下さい。

以上の注意を守つて、肩の力を入れず、不真面目な気持ちで読みましょう。

1・恋路なれども茨路（前書き）

「ここへ来たと言つことは……注意書きを読んだんだらうな？
読んでいないなら読んでから来い……そして戻つて来ない方が良い

注意書きを読んだ？

そうか……それでも読むか……

本当に読むのか？ 今なら後戻りできるぞ？

そうか……そこまで言つなら仕方ない

俺から教えてやることは一つだ

一つはこの話を書き終えたおつとりの奴の率直な感想……

「うわあ……」だそうだ

一つ目は「これを読んだらお前はきっと後悔する」つてこと……

それだけだ

1・恋路なれども茨路

その日、私は本庁でデスクワークをこなしていた。デジタル化の時代。部下達は皆、自分の机に備え付けられたパソコンでせつせと仕事を済ませてしまう。しかし、私はそうはいかない。なにせ、機会音痴なのだ。思うようにならないパソコンと睨めっこをする気力も時間も無いから、ペンを片手に書類を完成させて行くことにした。もう何年もこうして來たのだ。「パソコンなんかに負けはない」そう思ったのだが・・・。やはりデジタルはすごい。部下達は次々とデスクワークを終わらせ、帰宅したり、あるいは聞き込みに出かけたりして行く。気が付くと、暇を持て余す部下数名と私だけが残された。

「大変そうですね。手伝いましょうか、田暮警部？」

部下の一人がコーヒー片手にそう言つて來た。「機械音痴」は私の責任。部下の足を引っ張るようなことはごめんだ。私は部下の気遣いをやんわり断ると、再び書類の上でペンを走らせ始めた。そんな時だった・・・。

「田暮警部、お密さんですよ。」

部屋の入り口で部下が私を呼んだ。お客？ 誰か来る予定だつたらどうか？ 私はペンを止めると扉の方を見た。

「失礼します。」

そう言って入ってきたのは見慣れた少女だった。元部下で、今や全國にその名を轟かす名探偵となつた男の一人娘。自分も彼女が小さ

い時から見て来たから良く知っている。

「やあ、蘭くんじゃないか！ どうしたんだね、こんな所にやつて来て？」

彼女が警視庁にやつて来るのは、そう珍しいことではない。彼女の父親が解決した事件や、その他、彼女自身が巻き込まれた事件の調書を作成する際に話を聞くため呼んだりするからだ。しかし、今日はこれと黙って彼女を必要とするような仕事は無い。では、彼女は一体何の用事で來たのだろう？

「良かった～、警部がいて。知らない刑事さんだけだつたらびしきよつ？ つて少し不安だったんですよ。」

彼女はせつしめて、私の所まで歩み寄つて來ると大きな紙袋を差し出して來た。

「この間、お父さんと口ナソくんと一緒に北海道に行つて來たんです。それで、いつもお世話になつてている警部や刑事さん達にお土産を。」

「北海道か・・・。楽しかったかね？」

「ははっ・・・。殺人事件に巻き込まれました。」

また、不幸を呼び寄せたのか。あの男の死神ぶりは相変わらずのようだ。私は彼女からお土産の袋を受け取りながら苦笑いを浮かべた。

さて、ゆっくり彼女の相手をしてあげたいところだが、そもそも言つていられない。なにせ、片付けなくてはならない書類がまだたく

さん残つていいからだ。私は彼女に、しばらくすれば佐藤君や高木君が戻つてくるであろう事を伝えると、再び机に向つてペンを握つた。彼女も、私の机の上に積まれた書類を見て状況を察してくれた。私が話しかけてくるようなことはせず、大人しく佐藤君と高木君を待つてゐるようだつた。そのおかげもあり、私は変に集中力を乱されることもなく、順調に書類を片付けていくことが出来た。そうして、ようやく仕事に終わりが見え始めた頃だつた。黙々とペンを走らせる私の横に、突然コーヒー カップが置かれた。

「お疲れ様です。」

振り返ると、彼女がそう言つて微笑んでいた。どうやら、このコーヒーは彼女が淹れてくれたらしい。そんなことしてくれなくとも良いのに。私はお礼を言つと、彼女の淹れてくれたコーヒーを飲みながら、残りの仕事をさつと終わらせた。やつと・・・。私も少しパソコンを勉強した方が良いのだろうか？ そんなことを考えながら伸びをすると、真っ暗になつた窓の外が目に付いた。時計を見ると、もう七時を回つている。

「わしも帰るか。」

そう呟いて、帰り支度を始めた時だつた。私は、部屋の隅の椅子に腰掛けたまま寝をしてゐる彼女を見つけた。まだいたのか・・・。ということは、佐藤君や高木君はまだ帰つて来ていないのでどううか？

「佐藤さんと高木なら、さつき『指名手配中の男に似た不審者を注意同行した』っていう所轄署へ行くと報告を受けましたよ。」

部下に聞くとそう返つて來た。しまつた・・・。暗くなる前に帰る

ように言つべきだった。

「蘭くん！ 蘭くん！」

「う・・・ん。あ、すみません！ 寝てました。」

私は彼女を起こすと、高木君や佐藤君はしばらく戻つて来れないことを彼女に伝え、そして、車で家まで送つてやることにした。

帰り道は、帰宅時間といふこともあり少し混んでいた。毛利君はきつと心配しているだろう。私は少し責任を感じつつ、米花町の彼女の家を目指して車を走らせた。しかし、他の車が多く、なかなか思うように進めない。普段はこつ言つことはあまり気にしないが、今日に限っては、「早く進んでくれ」と心の中で念じた。良く知った仲とはいえ、若い女の子と車中に一人と言つのはどうも気まずい。私はチラリと助手席に座る彼女を見た。彼女は少し寂しげな瞳で、通りを行き交う人の流れを見つめていた。こうして見ると、やはり彼女は母親似だ。ついこの間まで子供だと思っていたが、随分と美しく成長したものだ。おつと、いかんいかん！ 元部下の娘に「そんなこと」を感じるなど、節操が無い。私は再び前を見ると、運転に集中した。

「グス・・・グス・・・。」

それは突然だつた。彼女は、突然ボロボロ泣き出しちゃつた。訳が分からぬ……。私は何か彼女に悪い事でもしてしまつたのだろうか？ いや、どう考へても普通に運転していただけだ。ではどうして？ 私は困つた末に、近くにあつたファミレスの駐車場に車を止めた。

「どうしたんだね蘭くん？ 何かあったのかね？」

私は彼女に尋ねた。すると、彼女はばつが悪そうに涙を手で払いのけると、私から顔を背けてしまった。

「すみません、何でも無いです。」

「何でもないようには見えなかつたが……。何か困つていぬことがあるのなら相談にのつてあげるよ？」

彼女は黙つている。まあ、突然人目もばからずに泣き出してしまう位だ。余程のことだらうし、私に相談されても解決できるとも限らない。それに言いたくないこともあるだらう。私は、とりあえずそつとしといてやろううと思い、再び車を発進させようと車のキーに手を伸ばした。

「北海道で殺人事件があつたんです。」

彼女は唐突に口を開いた。殺人……どうやらさつき少し話していた事件のことらしい。

「犯人と被害者の関係なんんですけど、元々幼馴染で恋人だつたらしいんです。でも、遠距離恋愛になつて、心がすれ違つようになつて、そして……殺意に変わつてしまつた。」

再び彼女の目から涙がこぼれた。街の明かりを反射しながら彼女の頬を流れ落ちて行くそれを、私は黙つて見つめていた。

「離れた場所にいるつて、大変なことなんですね。同じ空の下にいるのに、私は学校で勉強したり、友達や家族とおしゃべりしたり。

でも新一は・・・。」「

犯人と被害者の姿に、自分と、自分が思いを寄せる幼馴染の名探偵の姿を重ね合わせてしまったのだろう。そういえば、彼女は今日、佐藤君と高木君を待つていてるようだつた。ひょっとしたら、仲の良い恋人であるあの二人の姿を見て癒されたかったかもしねり。

「恐いんです。一緒にいられないことが、この手で触れられないことが、メールや電話じゃなくて、生の声で新一を感じられないことが・・・。」

そこまで言つて、彼女は声を上げて泣き始めてしまつた。恋の相談・・・。私が、一体どんな言葉を彼女に掛け、慰めてやることができるだらう? 己の限界は弁えている。パソコンのように・・・。

「・・・・・」

彼女は一瞬驚いた表情を見せる。不器用かもしけないが、私にはこれが精一杯だ。私は彼女を包むように抱しめた。彼女は今凍えている。人の心変わりという、辛い現実を目の当たりにしてしまい打ちひしがれている。そんな彼女の心の傷を癒してあげるために、私が出来ることなど・・・。

彼女は泣いた。私の胸の中で、ただひたすら。私は身じろぎせず、ずっと彼女を抱きしめ続けた。か弱く、傷つきやすい胸の中の少女を、この世のあらゆる残酷さから守りたくて。娘を持つ父親の気分、といったところだらう。そう思つた時だつた。車窓から人の流れを見つめる、寂しげな表情の彼女が脳裏を過ぎつたのは。途端に胸の辺りが苦しくなり、体が熱くなる。娘を思う親? 少し違う気がする。この感覚には、遠い昔のことだが覚えがある。そう、み

どりと出会った少し後に感じた、あの懐かしい感覚・・・。ダメだ！ 相手は蘭なんだ！ それに私にはもう、みどりと言ひ立派な妻がいるではないか！ そう思つて、自分の中の衝動をもみ消そうとした。しかしその度に、彼女の、あの美しい横顔が浮かんで来てしまう。こんなに美しい彼女・・・。欲しい！ 彼女の輝く涙を、全てこの体で受け止め、代わりに溢れんばかりの笑みで、その顔を満たしてやりたい。欲しい！ でも・・・ダメだ。しかし・・・、いや、でも・・・、そうは言つてもやはり・・・。

「・・・すみません。」

私が心中で葛藤しているうちに、いつの間にやら泣き声は聞こえなくなっていた。あれだけ泣いたのだ。さすがに気が済んだのだろう。

「ありがとうございました。胸、借りちゃって。フフ、本当に・・・。
日暮警部の恋人になっちゃおうかな。」

冗談を言いながら、彼女は笑顔で私を見つめた。彼女にはやはり笑顔が良く似合う。本当に、良く似合う。似合つ、本当に、私の理性を、突き崩してしまうくらい・・・。

「んッ！？」

彼女の腕にグッと力がこもつた。でも、私は離さない。その体も、唇も、もう離さない。私はその想いを全てこの口付けに込めた。彼女は驚いたかもしれない。あるいは嫌だったかもしれない。しかし、そんなことは考えないことにしよう。今ある事実は、彼女の腕の力が抜けたこと。そして、その腕が私の背中に回されていることだ。彼女に拒絶の意思が無くなつたことを確認し、私は一度、彼女から

唇を離した。

「田暮警部……。」

「蘭くん……。」

互いに一言田が出て来ない。いや、もう何も言つ必要は無いのかも
しない。離れたくなかったのだらうし、何より離したくなかった。
私達は再び口付けを交わし、互いを求め合ひ口付けて舌を絡ませた。
そして、また見つめ合ひ、口付けし、見つめ合ひ……。

そんなことが幾度続いたるつか？　その後のことは、もう何が
何だか……。ただ、私が田を覚ますと、そこは家のベッドではな
かつた。私の見覚えのある寝室ではないし、布団の臭いも私のもの
とは違う。それに何より、私の腕の中。一糸纏わぬ姿で小さな寝息
を立てている……。だんだんと思い出されて来る、彼女との熱い
記憶。ああ、とんでもない事になってしまった。きっと私はもう戻
れない。全てを失う。きっと毛利君は私を恨むだらう。みどりも……。

でも良こや。この腕の中にあるのだから。これから先、どんなに
茨の道が待つていようと、この腕の中の彼女を、幸せを、笑顔を、
守ると決めたのだから。

おしまい

1・恋路なれども茨路（後書き）

「JJJまで読んできたあなたへ・・・

つてことで田蘭？　暮蘭？

我ながら引きました

ここまで来ると・・・原作レ　ブですね

クラウザーさんです

Go to DMC！

Go to DMC！

ん？

誰だ！JJJまで読んできたくせに文句言つてゐ奴は！

S A T S U G A I すんぞ！

つてJJDJJ愛読ありがと「JJJれこました^ ^；

2・そこには在りしは我が喜び（前書き）

おかえりなさいませ！「ご主人様！　お嬢様！
こちらのお席へどうぞ～

へ？　この先に進む？

それは・・・それだけはお止めください！

うう・・・どうしてもと仰るなら「注意書き」を読んでください・・・

・

読んで来られたんですか・・・？

うう・・・メグメグとしては思い止まって欲しかったですう・・・
でもそこまで仰るなら仕方無いですね

それでは「おつとりさん」の書き終えた時の感想だけお教えします

「自分でやつてて・・・涙が出る・・・」

だそうです

いつてらつしゃいませ！　ご主人様！　お嬢様！
メグメグはここから無事をお祈りしておりますう

2・そこには在りしは我が喜び

それは「いつもの」と、だった。私は、いつものように探偵団の子供達に誘われてキャンプに出かけ、いつものように事件に巻き込まれた。そしていつものように、彼の陰ながらの活躍で事件は解決するはずだった。

「逃げたぞ！」

そう、その言葉を聞くまでは全てが「いつもの」と、だった。

一体、何がどうしたのか？ 私は、犯人が逃げる瞬間を見ていなかつたので分からぬ。私が見ていたのは工藤君、今は江戸川君かしら？ 江戸川君が山村刑事を麻酔銃で眠らせ、いつものように推理ショーをして、そして犯人が数名の警察官に連れて行かれるところまで。そこで私は安心し、キャンプ道具をまとめて帰る準備をするため、その場を後にしようとしたのだ。しかし、私が余所見をしていたその数秒の間に、「いつも」が「いつも」でなくなる何かがあつたらしい。

「いつやあ山を搜索せにゃ……。山村！ 一体、何を考えているんだ！」

何が起こったのか？ それを知るために辺りを見回すと、さつきまで賞賛を受けていた「おでこ」が怒られていた。解決したのは江戸川君だが、表面的には山村刑事ということになつていて。なのに、何故彼が怒られなければならないのか？ 私は、近くにいた警察官に何があつたのかを聞いて見た。

「山村さんが犯人を捕まえ損ねたんだよ。」

それは、今まさに犯人をパトカーに乗せようとした時だった。警官達の一瞬の隙をついて犯人は逃走を謀ったのだ。捕まえようとする警察官や刑事達の合間をぬつて、犯人は力モシ力の様な脚で山へ向つて走つた。しかし、その進路上には一人の刑事がいた。そう、山村刑事だ。

「山村！ 捕まえろ！」

一人の刑事が叫んだ。しかし、その叫びも虚しく、犯人は山村刑事の隣をすり抜けることに成功した。犯人自身も驚くほど簡単に・・・。彼が眠つていたからだ。博士を探偵役にしなかつたことが悔やまる。しかし、それだと起きている山村刑事が鬱陶しいからと、戸川君は・・・。

そんなこんなで、犯人は逃げてしまい、彼は「名刑事」から「ダメ刑事」に格下げになってしまったのだ。

「自分の推理に酔つて、周りが見えなくなつたのか？ 自惚れもいい加減にしろ！」

ああ、あんなに怒鳴られて・・・。訳も分からずビクついているその背中はとても小さく見える。ひとしきり怒鳴ると、彼の上司は犯人捜索のため去つて行つた。彼はと言つと、呆然とした表情で硬直している。寝ていたので状況が飲み込めていないのだろう。しかし、上司に怒られ、自分が「ダメ刑事」のレッテルを貼られてしまったことは理解したらしい。大きな溜息をつくと、近くにあつた切り株に腰掛けすっかり落ち込んでしまつた。可愛そうに・・・私は彼を慰めてあげることにした。

「元気出しなさいよ。別に、逃がしたのはあなただけのせいじゃないわ。」

「君は阿笠さんとの……。」

隣に座つた私を、彼は力無い瞳で見つめた。まるで霸気が感じられない。さつきまであんなに元気だったのが、まるで嘘みたいだ。

「僕つて本当に、どうしてこんなにダメなんだり？。」

「あなた、別にベテラン刑事つて訳でもないんでしょ？　まだ若いんだし失敗だつてするわよ。」

「そうかな？　君らは警視庁の刑事さん達とも知り合いみたいだけど、他の刑事さんと比べて僕つてどうなの？」

「そうね……。」

高木刑事や千葉刑事が頭に浮かぶ。みんな失敗して、日暮警部に怒られたりしているのを見かける。しかし、彼と比べるとどうだろう？　みんな確かに失敗するが、彼ほどでは・・・ない。ふと横を見ると、彼は青い顔をしていた。まだ何も言つていながら、私が黙っているから、今の質問の答えが分かつてしまつたかも知れない。

「刑事、辞めちゃおうかなあ。」

大きな溜息が漏れた。がつくりとうつな垂れたその体は本当に小さく見える。今私は、薬を飲んで小さくなる前の私より小さいが、彼の隣に座つているとさほどそれを感じない。本当に、小さい。なん

だか彼が可愛く見えてきました。

「そんなこと言わないで。みんなよりスタートラインが後だつただけじゃない。頑張ればきっと追いつけるし、追い越すことも出来るわよ。」

彼の背中に手を当てながら、私は言い聞かせるように言った。ここまで人を慰めたのは初めてかもしない。ただ、彼の中の幼さが私の母性本能をくすぐるので、どうにも慰めずにはいられないのだ。そして、そんな私の慰めは効果があったのか、彼は次第に瞳の輝きを取り戻して来た。

「そうだね！ 僕だつて頑張れば、きっと立派な刑事になれるよね！」

ようやつといつも元気が戻つて來たようだ。逃げた犯人はまだ捕まつていないが、こちらはとりあえず一件落着だらうか。私は「ふう」と、一つ肩で息をした。

「あ、そうだ。」

その時、立ち上がつて犯人搜索に向おつとしていた彼が、急に向き直つて私の方に戻つて來た。

「メールアドレス、交換してよ。」

「へ？」

「いやね。また失敗した時とか慰めて貰いたいなあ～、なんてね。」

子供に慰めて貰おうなんて・・・。彼が立派な刑事になるのはまだ
まだ先のようだ。

それからと言うもの、私と彼は時を見てはメールのやり取りを繰り返した。内容は「こんな失敗をした」とか「こんな手柄を立てた」などの彼のメールに、私が励ましのメールを送つたり、お祝いの言葉を送つたりといったものだ。そんなことを何度も経て、次第に私は彼に興味を持つようになつた。彼は私には無いものをたくさん持つていて、大人になつても変わらない、純粹な心。そして、どんなに失敗しても、何だかんだですぐに立ち直つてしまふ強い心。メールの文面から伝わつて来る彼の様子を想像するだけで、心が温かくなる。そつさせる力が彼にある。そつ、まるでお姉ちゃんみたい・・・。

そんなことを思い始めた頃、私は自分からもメールをするようになつていった。組織のことを思い出して、辛い時や泣きたくなつた時、私は彼にメールをする。取り留めの無いやり取り・・・。でも、私にとっては掛け替えの無い大切な時間になつた。最初は、彼が相談をして来るばかりのメールのやり取りだったのに、今では逆に私が励まされるようになつてしまつた。

そんなある日、私はまた彼にメールを送つた。しかし、その日はいつもと様子が違つた。普段なら、どんなに遅くても三時間以内にメールが返つて来るのだが、その日は半日待つても返信が来なかつた。仕事が忙しいのかもしない。夜になれば返つて来るだろう。そう思い、私はあまり気にせずについたが、結局その日、私の携帯が彼からの返信を知らせることは無かつた。

どうしたんだろう？ それから三日経つても、彼からの返信は無かつた。彼はいい加減な男だが、メールに関してはかなりマメだ。三日も私のメールを放りっぱなしなんてことは考えられない。とすると、彼の身に何かあつたのだろうか？

「受信・・・。」

今日も、朝から何度もメールをチェックするが、彼からのメールは無い。メールボックスを開く回数を重ねる毎に、私の不安はどんどん大きくなつていった。どうして？ 何故メールの返信が無いのか？ いなくなつてしまつたのだろうか？ 私の周りから、またいなくなつてしまつたのだろうか？ 膨らみ続ける不安で、胸が押しつぶされてしまいそうだ。目の前が暗くなつて、自分の足元から地面が崩れ落ちていく様な絶望感。暗い暗い闇の底。私の目の前には小さな灯火。私が手を伸ばそうとした時、その輝きはだんだん小さくなつていつた。ダメ！ 消えちゃダメ！ お願いだから消えないで！

私は目を覚ました。いつの間に眠つてしまつたのだろう？ 寝ぼけ眼をこする私の目の前では、携帯がメロディーを奏でている。ボーッとしながらも、私は携帯を手に取つた。「公衆電話」から？

『もしもし～し。哀ちゃん？ 山村です～。』

眠気が一気に吹き飛んだ。携帯から聞こえてくるのは、間違いなく彼の声だ。

『骨折して入院しちゃつてや。アタバタしてたんだけど、今日になつてようやつと落ち着いたんだ。それで一応哀ちゃんにも連絡しておひつかな～つて。』

いつもと変わらず、軽い調子で聞こえる彼の声。私の体から、スースと力が抜けっていく。

『哀ちゃん？ 聞こえてる？』

「馬鹿……。」

そして、気が付いたら私は涙を流していた。本当に、彼がいなくなつてしまつたと思ったから。携帯からは困った様子の彼の声が聞こえてくる。良かった。いなくなつていない。良かった。

それから私は、数分ほど彼と会話をすると電話を切つた。次第に落ち着きを取り戻してくる。そうすると、私はあることに気が付いた。彼がいないことがあんなにも辛いということ。彼がいることがあなたにも嬉しいということ。そして、私は彼が好きだということ。

私は、またキャンプにやつて來た。そう、いつものように探偵団の子供達に誘われて。そして案の定、いつものように事件。そして結局、いつものように江戸川君が、今回は博士を探偵役に事件を解決した。そして警察が事後の処理を済ませている時、私は現場の片隅でぽつんとたたずんでいる彼を見つけた。

「私達が会うのって、いつもここという所ね。」

「ははは、そうだね。コナンくんにお祓いしてもいいよ」と言つといでよ。」

「もつと、普段から一緒にいられたら良いのに……。」

「まったくだ。でも、江戸川君が事件を引き寄せたからこそ、私は彼と出会うことが出来た。」

「え？ 何？」

あまりに小さな声で言つたから、聞き取れなかつたのだろう。彼は

いつものように、のほほんとした表情で私の顔を覗き込んで来た。その大人なのに幼く純粋な笑顔を向けられて、私は遂に抑え切れなくなつた。

「私、好きよ。あなたが……。」

私の思いの丈。自分でも顔が真っ赤になつているのが分かる。こんな恥ずかしい思いをしてでも、どうしても言いたかった。彼のそばにいつまでもいられるようになるために。

「わ〜、女の子に告白されたのなんて初めてだよ。嬉しいもんだね。でもさ、君はちょっとばかし小さいからなあ。僕捕まっちゃうよ。」

まあ、分かつてはいた答えた。私は18歳だけど、今は7才の子供だ。彼が私の愛を受け入れられないのは当然のことだ。でも、それでも私は彼の隣に在りたかった。この体がもどかしい。元に戻れさえすれば、そうすれば……。

「まあ、どうしてもつて言うなら、君が大きくなつてからリトライしてくれちゃつてくれたまえ。」

冗談半分の彼の言葉が、私の耳に焼き付いた。

それからしばらくして、私は、宮野志保は群馬県を訪れていた。工藤君やFBIの人達のおかげで、組織は跡形も無く壊滅した。解毒剤も完成させ、工藤君も「工藤新一」を取り戻した。やるべきことは全てやつた。だから、私はここにやつて來た。暗闇の中で、やつと見つけた希望の光を手に入れるために。

群馬県警本部、その玄関から愛する人が仕事を終えて出て來た。どう? 私は小さな子供じゃないのよ? すっかり元に戻つたから、

あなたの言った通り大きくなつて來たから・・・

「あなたの隣に、居わせてください。」

2・そこには在りしは我が喜び（後書き）

おかえりなさいませ・・・^_^；

つてことで今回は山哀です

哀ちゃんのファンの皆様・・・本当に「めんなさい」。

ああ・・・切腹コールが聞こえてくる・・・

でもここまで読んできたつてことは

「最初から切らないつて分かつてる」つて感じの内藤選手のような慈悲深い人達ですよね？

そう願います^_^；

HARAKIRIは痛いからダメだよね

でも頭を丸めるくらいならします（ただ散髪に行きたいだけ）

つてことで次回をお楽しみに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8611c/>

アウト！

2010年10月10日16時09分発行